

複合語とその分類について

中 屋 晃

複合語とその分類について

中 屋 晃

目次

1. はじめに
2. 複合語とは
3. 複合語の分類
4. 動詞由来複合語
5. おわりに

1. はじめに

学生に英作文させると表現に苦勞する様子が書かれた英文から見て取れる。なかなか適切な表現が思い浮かばず、関係節を多用する傾向にあるのだが、これだと冗長な文になってしまう。そこで、簡潔さを狙って複合語を積極的に使うようにさせることが必要となろう。幸い英語の複合語、特に複合名詞と複合形容詞は生産性が高く、これらを上手に使うことにより表現の幅を広げることができよう。しかしながら、複合語という概念は意外に難しく、それを正しく理解し表現に使うというのは大変なことである。ここで役立つのは英語の形態論 (morphology) についての知識である。

本稿は、複合語とはいかなるものかを論じ、その特徴と分類方法について解説するとともに、その問題点を明らかにしようとして試みたものである。複合語はロマンス語ではあまり使われないが、英語では多用され、いろいろな複合語の表現が絶えず生まれている。例えば、child benefit (児童手当)、family hour (家族向けテレビ番組時間帯)、などの複合語が思いつく。また、新語として netizen (ネット市民)、yuppie (ヤッピー、若い都会派専門職エリート) などの表現が辞書に載っているが、そこから派生した netizenship (ネット市民権) や deyuppification (ヤッピーの排除) などは辞書になくても語形成の知識からある程度それらの意味を類推することができる。Katamba (2005, p.75) は、ハイフン付きの複合語表現として anything-goes-as-long-as-you-can-get-away-with-it-culture (うまくやりおおせるなら何でもありとする文化) を挙げている。関係節に代わる複合語としては、evidence-based (証拠に基づく)、student-centered (学生中心の)、time-consuming (時間のかかる)、game-changing (ゲームのあり方を変える) などの動詞派生複合語 (deverbal compound) がある。ここでは、複合語の分類を通じて、その理解を深めることをねらいとしている。

2. 複合語とは

二つあるいはそれ以上の語基 (base) からなり、文法と意味の両面で一つの単語として機能

する語彙単位を複合語と呼ぶ (Quirk *et al.*, 1985)。このように定義づけても、これは典型的な複合語とは言えないというケースがあり、判断基準は曖昧である。発音上の特徴としては、例えば orange juice (オレンジジュース) のような二つの構成素からなる複合語の場合、第一強勢は通常1番目の要素に置かれる。しかしながら例外もあり、例えば apple pie (アップルパイ) や shooting star (流れ星) については、それぞれ両方の要素に強勢がある。二つの単語がハイフンで結ばれたり、一語として綴られると複合語として認識されているとを感じるが、二語として表記されていると複合語ではなく、単なる統語形式としての句ではないのかという疑念が生じる。例えば、short story (短編小説) は複合語で、short trip (短い旅) は統語形式となるものだと判断できるが、short line や short list になると迷ってしまう。英語を母語としない人にとっては、適切な文脈と辞書がないと解決しないであろう。Lieber (2010) によれば、二つの語基の間に修飾語を入れると不自然な表現になってしまうものが複合語であるという。そこで、修飾語として easy を入れてみると short easy story (短い容易な物語) と short easy trip (短い容易な旅) が出来る。前者は英語の表現としては問題はないが、「短編小説」という意味がなくなってしまうので不適切だということになり、short story が複合語であることがチェックできる。さらに、short short story (超短編小説) のような複合語に新たな構成素が加わった紐状複合語 (string-compound) と呼ばれるものもある。

ハイフン付きの表現であれば複合語だとすることには問題はないのであろうか。複合語の多くは中心となる主要部 (head) とそれを修飾する非主要部 (non-head) から構成されている。英文雑誌などではこの非主要部にハイフン付きの句とか節をとる複合表現をしばしば見かける。これらのうち句をとるものについて島村 (2005) は「語彙化された句」(lexicalized phrase) と呼び、節をとるものを杉浦 (2005) は「語彙化された節」と呼び、典型的な複合語ではないとしている。複合語であればその構成素の間に修飾語は入れられないのだが、杉浦 (2005) は語彙化された節を主要部となる名詞の前に据えた複合表現について、下記に示されているようにインフォーマントの反応結果から容認度は下がるものの挿入はあり得るのかも知れないとしている。

- (1) a. an I-told-you-so attitude (言わんこっちゃないという態度)
 b. ?an I-told-you-so boastful attitude (言わんこっちゃないという自慢げな態度)
- (2) a. a devil-may-care attitude (楽観的な態度)
 b. a devil-may-care swashbuckling attitude (楽観的で勇ましい態度)

上記の (1b) では形容詞の boastful が複合語に挿入されることにより、容認度が少し低下している。一方、(2b) は British National Corpus より得た用例で、形容詞 swashbuckling の挿入が容認されている。devil-may-care と swashbuckling が意味的にやや近いということが容認度の向上につながっているものと思われる。I-told-you-so や devil-may-care は、節が臨時的にハイフンで結ばれ語彙化していった表現で形容詞としての機能を果たしている。従って、上記の複合表現を Lieber (1992) にあるように「句複合語」(phrasal compound) と呼ぶのは不適切であって、統語的には節となる表現がハイフンで結ばれ形態的には一語であるかのように名詞を修飾しているので、杉浦 (2005) は「語彙化された節」と名詞の複合表現であるとしている。

複合語のハイフンについては、必ずしも必要であるという訳でもない。例えば、「the try to

shut me up tour」(私を黙らせてよ世界公演)と題したカナダ出身のミュージシャンの巡回公演が2003年にあったのを記憶している。下記にあるように、ネット上ではハイフンなしのものとか、引用符を用いたものなどがしばしば見られる。

- (3) a. an I told you so attitude
b. a devil may care attitude

- (4) a. an “I told you so” attitude
b. a “devil may care” attitude

また、「再点検(する)」という意味の複合語ではハイフン付きの double-check とハイフンなし二語の double check が辞書に記載されている。辞書の表記方法から、ハイフン付きの double-cross (～を裏切る) は複合動詞 (compound verb) として、ハイフンなし二語の double cross は複合名詞 (compound noun) として用いるというように、用途に応じて使い分けているようにも見えるが、現実の用法は必ずしもそのようにはなっていない。複合名詞の airmail (航空郵便) は、かつては air mail と二語で綴られていた。その複合形容詞 (compound adjective) は air-mail とハイフンで結ばれていたが、今では airmail と一語で綴るのが普通となっている。『コンサイス英文法辞典』(安井稔 [編])によれば、「新しい複合語は2語で綴られることが多く、複合語として確立されるにつれて、1語として綴られる傾向が高くなるといえる」とのこと。一般的に、語基の結びつきが強まるにつれて、はなれていたものがハイフンでつながり、ついにはハイフンなしの一語へと表記形式が移行し複合語として確立する。この推移は複合語が広く認知され恒久的な語彙項目として辞書に載る過程と合致する。この点に関しては、Quirk *et al.* (1985, pp. 1569-70) を参照した。

なお、I-told-you-so については、会話表現でよく使う you see (ほら) やこの表現で you を省略した see を追加した複合表現もある。

- (5) a. a “you see, I told you so” attitude (ほら言わんこっちゃないという態度)
b. a “see, I told you so” attitude
c. a “see I told you so” attitude
d. a see-I-told-you-so attitude

ネット上では (5c) と (5d) にあるように、see の後のコンマが付かないものや、ハイフンで結ばれるものもあり、実際の句読点 (punctuation marks) の用法はかなり乱れていると言えよう。

では、1語として綴られる複合語については問題はないであろうか。語と語が結びついて複合語となると単純化できればいいのだが、接頭辞 (prefix) や接尾辞 (suffix) などの派生接辞と語の区別が明確でないものがあるため、異論が生じてくる。例えば、普通は単独では使われない theo-, neo-, cran-などをどう位置づけるかという問題だ。複合語は複数の語基からなるとされるが、語基とは単語のどのような部分を指すのであろうか。通常は語から屈折接辞 (inflectional affix) や派生接辞 (derivational affix) を取り除いたものが語基であるとされ、語根 (root) と同じ意味で用いられる。この定義に従えば、theo- と neo-は連結形 (combining form) と呼ば

れるもので接頭辞ではないから, theocracy (神政) とか theology (神学) や neoclassic (新古典主義の) とか Neolithic (新石器時代の) は連結形複合語 (combining-form compounds) ということになる。アメリカ構造言語学では, それ以上小さな部分に分けられない意味を持つ単位を形態素 (morpheme) と呼ぶのだが, cran-は低地ドイツ語に由来し, crane (鶴) を意味する形態素である。この形態素 cran-は単独で使われることはなく, いつも語基-berry に結びついている。S. R. Anderson (1990) によれば, 辞書に個別の項目として cran-を載せる必要はないとのこと。従って, 求められているのは cranberry の意味を辞書に載せることで, この単語が二つの語基からなり, 前の語基 cran-が後ろの語基-berry に拘束されていることが理解されれば, 問題は解決するということになる。ちなみに cran-は, 語基-berry としか共存しない拘束語基 (bound base) と呼ばれるもので, cranberry は複合語である。語源ということでは, 複合語と判断できる単語の中には, 構成素となるべきものが弱音節の弱化・脱落で消滅したものもあり厄介である。例えば, hussy (おてんば娘) は中期英語の huswif (housewife) に由来するが, house に相当する hus は識別できても, wife に相当する wif は見えてこない。このような説明をされても語源の正しい知識がなければ, 与えられた形態素が接辞なのか, 連結形なのか, あるいは拘束語基なのかの判断が出来ず, 1語で綴られる複合語を識別するのはかなり困難だと言わざるを得ない。

3. 複合語の分類

複合語は多種多様であり, その分類は何を基準にするかによって変わってくる。Katamba (1993, p.304) によると, 複合語は通常次の (ア) と (イ) の基準によって分類されるという。

- (ア) 主要部を持つかどうか
- (イ) 主要部があるものについては
 - A) 主要部の品詞で分類
 - B) 主要部となるのが左右どちらの要素かで分類

英語の複合語の大部分には主要部があり, 通常は右側の要素が主要部となり, 「修飾語 + 主要部」という意味関係を持つ。非主要部となる左側の要素が主要部を修飾し, 主要部が所属する種類の下位範疇を示す働きをするもので, 主要部の本質的な意味を変えるものではない。このような複合語を内心複合語 (endocentric compound) という。例えば, a driving test (運転免許試験) は a kind of test (一種の試験) であり, 試験であることに変わりはない。従って, これは内心複合語であるとなる。一方, 意味的な主要部となる構成素を持たない複合語は外心複合語 (exocentric compound) と呼ばれ, 複合語全体の意味が主要部の一種とはなっていない。つまり, 非主要部が主要部を修飾するという意味の関係を持たないということになる。例えば, rubberneck (野次馬) は a kind of neck (一種の首) ではない。neck の本質的な意味が変わっており, rubberneck は neck の下位範疇を示している訳ではない。この複合語の構成素から人を指していることを類推するのは不可能で, 外心複合語であるということになる。外心複合語のその他の例としては, rough house (大騒ぎ), runabout (小型自動車, 小型飛行機), handout (配付資料), shortcut (近道), turnout (参加者数) などがある。外心複合語の構成素から全

体の意味を理解するのはイディオムに似て困難である。幸い、外心複合語の新語が生まれることは内心複合語に比べはるかに少ない。

複合語を主要部の機能から決まってくる品詞を基準に分類するのは分かりやすい。英語の品詞に対応して、複合語を複合名詞、複合代名詞、複合形容詞、複合動詞、複合副詞などのように分類することができる。これらの中で一番多いのは複合名詞 (compound noun) で、次に多いのが複合形容詞 (compound adjective) である。これら二つに比べると、複合動詞 (compound verb) の数は少ない。その他の品詞の複合語は、さらに数が少なく、ほとんど限られたものしかない。そうになると、分類上で注目すべきは複合名詞、複合形容詞、複合動詞の三つということになる。

ロマンス語では複合語の主要部が通常左側に來るが、英語では右側に主要部が來るのが普通である。英語にも少数派ではあるが、runner-up (次点者), secretary-general (事務総長), editor in chief (編集長) のような左側主要部複合語 (left-headed compounds) がある。英語では右側主要部複合語が多いことから、Williams (1981) は複合語 (complex word) の主要部は右側の要素であるとする右側主要部規則 (Right-hand Head Rule) を提起したが、この規則は普遍的ではないことが分かる。なお、editor in chief のような複合表現はいわゆる句複合語と呼ばれるものに相当する。

次に別の分類方法を紹介したい。Bisetto and Scalise (2005) は複合語を次の三種類に分類している。

- (ウ) 限定複合語 (attributive compound)
- (エ) 等位複合語 (coordinative compound)
- (オ) 従位複合語 (subordinative compound)

限定複合語とは、二つの構成素の一方が他方を修飾する関係にあり、非主要部が主要部の修飾語となる働きをするものを指す。例えば、surface mail (船便), soy bean (大豆) など。等位複合語とは、二つの構成素が対等の比重を持ち、両方が意味的主要部となっているものだ。例えば、bitter-sweet (ほろ苦い), blue-green (青と緑の中間色) など。これらは連結複合語 (copulative compound) とも呼ばれているもので、構成素の間に and を補って解釈することができる。従位複合語とは、一方の構成素が他方の文法項 (argument) となるものだ。文法項とは、統語上動詞に不可欠な主語、目的語、補語などの名詞句のこと。通常は目的語となるケースが多い。例えば、rice cooker (炊飯器), road sweeper (道路清掃者) など。road sweeper は「someone who sweeps a road」(道路を清掃する人) と統語的に捉えることが出来る。

複合語の分類方法はいろいろあるので、目的に合わせて使い分けるのがよいであろう。次のセクションでは主要部に動詞の分詞が來る動詞由来複合語 (verbal compound) について扱うことにする。

4. 動詞由来複合語

Katamba (1993, p.308) によると、動詞由来複合語は次の特徴を持つという。

- (カ) 主要部となる複合的な (complex) 形容詞ないしは名詞があって、それは動詞か

ら派生したものである。

- (キ) 非主要部の構成素は、主要部の動詞派生名詞 (deverbal noun) あるいは動詞派生形容詞 (deverbal adjective) の統語的文法項であると解釈できる。
- (ク) 非主要部の主題役 (theta-role) は、動作主 (agent), 被動者 (patient), 道具 (instrument), 場所 (location) などである。
- (ケ) 複合語の意味が、透明で (transparent) ある。つまり全体の意味が複合語を構成している要素の意味から合成できる。

ここでは、動詞由来複合語の中でも動詞の分詞が右側に来て主要部となるものに、そして機能としては形容詞的に働くもの限定して取り上げてみる。分詞が入ることにより統語的構造が複合語の内部にあることが見えてくる。動詞由来複合語をこのような観点から下位分類するのに非常に実用的だと思えるのは竝木 (1985) が紹介する動詞の分詞形で分ける方法だ。下記の (6) に使われている記号について、Ving は動詞の ing 形, Ved は動詞の過去分詞, Prt は不変化詞 (particle), N は名詞 (noun), A は形容詞, Adv は副詞を表す。

- (6) a. N-Ving b. N-Ved c. A-Ving d. A-Ved e. Adv-Ving f. Adv-Ved
g. Ving-Prt h. Ved-Prt

本稿の「はじめに」で関係節に代わる複合語として示した動詞派生複合語 (deverbal compound) は次のように分類できる。

- (7) a. game-changing (ゲームのあり方を変える) N-Ving の型
- b. time-consuming (時間のかかる) N-Ving の型
- c. evidence-based (証拠に基づく) N-Ved の型
- d. student-centered (学生中心の) N-Ved の型

次にその他の型の例を示す。

- (8) a. good-looking (容姿端麗な) A-Ving の型
- b. sour-turned (すっぱくなった) A-Ved の型
- c. fast-moving (動きの速い) Adv-Ving の型
- d. newly-appointed (新任の) Adv-Ved の型
- e. falling-apart (崩れかけている) Ving-Prt の型
- f. worn out (使い古した) Ved-Prt の型

竝木 (1985) によると、A-Ved の型と Ving-Prt の型はあまり使われていないとのこと。A-Ving の型で使われる元の動詞は補語に形容詞を取れるもの限定される。造語力があってよく見かけるのは名詞を非主要部にとる N-Ving の型と N-Ved の型だ。N-Ving の型では (7a) と (7b) にあるように二つの構成素が目的語と動詞の関係になるのがほとんどである。次の例にあるような、N が前置詞の目的語となるものは多くはない。

- (9) a. ocean-going (外洋航行の)
- b. day-dreaming (白昼夢にふけている)
- c. fist-fighting (殴り合いの)

これらの例は Quirk *et al.* (1985, p.1577) にあるものだが, (9a) は「go across oceans」, (9b) は「dream during the day」, (9c) は「fight with fists」のように前置詞を使って言い換えることができる。

N-Ved の型でも前置詞を介して名詞と動詞の関係が理解できるものがいろいろある。次にあるのはそのような例である。

- (10) a. heartbroken (悲嘆に暮れた)
- b. earnings-related (所得に応じた)
- c. event-driven (イベント駆動型の)
- d. diamond-cut (菱形に切った)

(10a) は「broken at heart」, (10b) は「related to earnings」, (10c) は「driven by an event」, (10d) は「cut in a diamond shape」と言い換えることにより構成素間の関係が見えてくる。

5. おわりに

英語学習者の視点から見れば、複合語にはいろいろな種類があって、それらを正しく理解し意識的に使用するのなかなか容易なことではない。そこで、多くの用例が見つかる複合名詞と複合形容詞に焦点を当てて学習し、それらを英作文などで意識的に使用するのが効果的かと思われる。複合語に内在する統語的構造から明らかなように、節を使いすぎて締まりがない表現になってしまった文章を複合語で簡潔に言い換えることが出来るようになることが英作文上達には必要であろう。また、本当の英語力の向上には語彙力の強化が欠かせない。その際、形態論についてある程度知っておくと、単語がどのような単位から構成されているか理解しやすくなるであろう。

本論では、複合語がどのようなものであるかを解説するとともに、目的にかなった合理的な分類方法がないか模索してみた。その中でも動詞の分詞形と他の構成素が結びつきうるパターンから動詞由来複合語を分類するという竝木 (1985) の方法が分かりやすく有益である。例えば、複合形容詞を扱うような場合には、動詞派生複合語の中でも使用頻度の高い N-Ving の型と N-Ved の型に重点をおいて指導すると効果が上がることになるであろう。複合名詞の中にも動詞の分詞形が使われているものが非常にたくさんあるので、今後、研究対象とする複合語の範囲を広げていきたい。

参考文献

- Anderson, E. R. 1990. *A-morphous Morphology*, MS, Cognitive Science Center, The Johns Hopkins University.
- Araki, K. and M. Yasui. (荒木一雄・安井稔) (編) 1992. 『現代英文法辞典』三省堂.
- Bisetto, A. and S. Scalise. 2005. "The Classification of Compounds." *Lingue e Linguaggio* 4, 2: 319-32.
- Ishibashi, K. (石橋幸太郎他) (編) 1973. 『現代英語学辞典』成美堂.
- Kageyama, T. (影山太郎) 1999. 『日英語対照による英語学演習シリーズ2・形態論と意味』くろしお出版.
- Katamba, F. 1993. *Morphology*. Macmillan Press.
- Katamba, F. 2005. *English Words, 2nd edn*. Routledge.
- Lieber, R. 1992. *Deconstructing Morphology: Word Formation in Syntactic Theory*. University of Chicago Press.
- Lieber, R. 2010. *Introducing Morphology*. Cambridge University Press.
- Namiki, T. (竝木崇康) 1985. 『語形成』新英文法選書 第2巻. 大修館書店.
- Otsuka, T. (大塚高信) (編) 1959. 『新英文法辞典』三省堂.
- Otsuka, T. and F. Nakajima. (大塚高信・中島文雄) (監修) 1982. 『新英語学辞典』研究社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Shimamura, R. (島村礼子) 2005. 「句の語彙化について」『現代形態論の潮流』くろしお出版.
- Sugiura, T. (杉浦隆) 2005. 「英語における語彙化された節について」『英語語法文法研究の新展開』英宝社.
- Terasawa, Y. (寺澤芳雄) (編) 2002. 『英語学要語辞典』研究社.
- Williams, E. 1981. "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word'." *Linguistic Inquiry* 12, pp. 245-74.
- Yasui, M. (安井稔) (編) 1996. 『コンサイス英文法辞典』三省堂.

[Abstract]

English Compounds

Akira NAKAYA

This paper examines compounding in English with the ultimate focus on verbal compounds. The first point discussed is how to decide whether a sequence of words is a compound or not. The definition of compound entails morphological problems. The second point is how to classify compounds. Since there are various forms of compounds, classification differs among linguists. Some practical ways of classification are introduced here. With a view to using compounds in writing, verbal compounds are dealt with. Namiki (1985) uses tags like “Ving” and “Ved” to show possible patterns and sort verbal compounds into eight groups. His classification method is straightforward and easy to adopt in teaching writing. In further studies, I would like to shift the focus to other kinds of compounds.